

選擇集解説

(前號よりつづく)

小西存祐

四、内容の組織について

次に問題は爾らば宗祖はそのいはゆる浄土の要文をどこから選びだし、又いかやうにそれを配列せられたかといふことであります。それについて和語燈録のなかに次のやうな一問答があります。

問 浄土の法門にまづ何々を見て心づき候なん。答 經には雙卷觀無量壽小阿彌陀經等を浄土三部經となづく。文には善導の觀經の疏六時體讚觀念法門、道綽の安樂集、慈恩の西方要決、懷感の群疑論、天台の十疑論、わが朝の人師には惠心の往生要集などは、つねに人のみるものにて候へ。たゞし何を御覽せずともよく御意元ありて念佛申させ給ひなんに往生何事かうたがひ候べき(要義問答)

一体この問題は何人が對手であつたか能く解かりませんが、とにかく宗祖が選擇集の中に引用してゐられる十六章の要文は、大體こゝに列擧されてある經釋の中から抜きだされたもので、宗祖のこのお答は一面からいへば全く選擇集の縮圖だとも云へばいふことができます。

尤もその經釋の配列の仕方にいたつては二者まつたく趣がちがつてゐます。こゝでは一般に浄土の法門に關する經釋の要典を指示されるのが主眼でありましたから、本末次第して、最初にまづ正依の

經典すなはち淨土の三部經を出だし、次に人師の釋文を擧げてゐます。また同じ人師の中でも、殊に善導はいはゆる偏依の師でありましたから、最初にまづ善導の釋なかんづく觀經の疏を第一に出だし次に道綽の安樂集、惠心の往生要集といふ順序で、輕重大次第して配列がしてあります。

處が選擇集は前にも述べたやうに、宗祖の信仰の告白書であつたのでありますから、宗祖は御自分の入信の經路によつて、まづ第一に惠心の往生要集を引用せられました。いはゆる南無阿彌陀佛往生之業念佛爲先といふ題下十四字の文がそれであります。これは蓋し宗祖がまだ出離の道に煩つてゐられたころ、われらの出離は往生により、往生は念佛によるといふ大體のヒントを、この要集から得られたからなので、かの淨土隨聞記に、『予故往生要集以爲先導入淨土門』と申されてゐるのが、即ちその意味であります。

けれども往生要集は、前述のごとく決局宗祖に對してたゞさうした大體のヒントを與へたといふまゝで、その委細の義に至つては、もとより道綽善導の釋義に俟たなければならなかつたのであります。されば宗祖も同略料簡に、

私云、惠心已定往生得否、以善導道綽而爲指南也。又處々多引用綽導二師之釋。然則隨順惠心之輩、必當歸依道綽善導、披安樂集、明了聖淨二門之意、閱觀經疏、領會安心起行之旨、以爲出離解脫準則也。

と申されてあります。

そこで宗祖は往生要集について第一章に道綽の安樂集を引き、われらの出離が往生に依らなければならぬ所以を明らかにし、第二章にをいて善導の觀經の疏を引いて往生の念佛に依らなければならぬ所以を明らかにされました。

かくして宗祖は惠心、道綽、善導の三師の説によつて、ほゞ自分の信仰の輪廓を述べ、結局われ／＼は念佛に依るにあらざれば解説の不可能なる所以を述べられてゐます。で苦しそれを平易な言葉に換言してみるとすれば、だいたいかの大胡の消息にあるやうに

されば詮するところ、極樂にあらざば生死をはなるべからず(第一 章段)。念佛にあらざば極樂へむまるべからざるものなり(第二 章段)。ふかくこのむねを信せさせ給ひて、一すちに極樂をねがひ、一すちに念佛して(往生之業、念佛爲先)、此度必ず生死をはなれんとおぼしめすべきなり。

といふことに歸着すると思ひます。

しかし己上は、何をいふにもみな人師の指南であります。そこで宗祖は次いで第三章以下に、三經の要文を引用されることになりました。つまりこれは本源に溯つて、人師の指南の依つてきたる根據を明らかにされる意であつたと思はれます。

三經配列の順序は、大體に説時の前後によつて大經、觀經、彌陀經といふ順序になつてをり舛が、

そのこゝろは、三佛の御意によつて三經おなじく念佛を宗とする旨に結歸するに在つたものとおもはれます。即ち大經は彌陀の本願、觀經は釋迦の附屬、阿彌陀經は諸佛の證誠といふ邊から三經の歸趣を念佛の一行に落在せしめてあります。されば三經を引き終つて

私云、凡案三經意、諸行之中選三擇念佛以爲旨歸。乃至。然則釋迦彌陀及十方各恒沙等諸佛、同心選三擇念佛一行、餘行不爾。故知、三經共選念佛以爲宗致耳。

と結び、續いて『計也夫欲速離生死云々』といつて特に念佛の一行を結勸されてゐます。

しかし宗祖が、かく三經の宗致を念佛の一行に結歸されたと云ふことは、偏へに善導の指南に基いてゐます。それゆへ宗祖は次に偏依善導の理由を問答料簡し、最後にその本迹の徳を嘆して一篇を結んでゐられます。

こういふ風に眺めてくると、選擇集は誠によく終始脈絡が貫通してゐて、決して無雜作に經釋の文を羅列されたものでないと思ふことが了解できます。是はわれ／＼が本集を繙くに際し、まづ心得て置かなければならぬ第三の要點だと思ひます。

本 說

一、題號について

別に解説をするほどの事もないと思ひますが、題は一部の總稱と云ひますから次にひと／＼はり題號

の説明をして置こうと思ひます。

選擇本願念佛集、略して通常たゞ選擇集といつてゐます。多分これは惠心の往生要集に倣つてつけられた題號であると思はれます。往生要集は、その序文に『夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也。道俗貴賤、誰不歸者。是故依念佛一門、聊集經論要文』とあるところから、いふところの往生要集といふ題號が出てきました。同様にこの選擇集も、その末尾に『今不圖蒙仰、辭謝無地、仍今慙集念佛要文』とある邊から、まづ題して念佛集と申された譯で、言ふ意は、念佛の要文を集めた文集といふ意味であります。

けれどもたゞ單に念佛の文集といつた丈では、いふところの念佛は觀念のそれであるか、將た稱念のそれをいふのみか。又た稱念のそれであるとしても、いふところの稱念は諸師のやうに、萬行と同列に見た所謂萬行隨一の念佛であるか、それともまた善導のやうに、何らか特別の意義を認められた稱念を指すのか一向その邊が明らかではありません。

そこで宗祖は『念佛』の上に『本願』といふ二字を加へて、今の謂はゆる念佛は稱念のそれには相違ないが、しかしその稱念は諸師所立謂はゆる萬行隨一のそれではなくて、彌陀が特に本願として誓はれたといふ即ち善導所立の念佛である。詳しくいへば、善導が見られた様な意味に於ける稱念で、その意を表はさんがために、念佛の上に本願といふ二字を置いて本願念佛集と題されたのである。言

ふ意は、彌陀の本願である念佛に關する文集といふ意味であります。

それで今集の題號としては、實はそれだけで既によくその意味が表はれてゐる譯であります。宗祖はさらにその本願の上に選擇といふ二字を置いて、選擇本願念佛集と題せられてゐます。

それについて鎮西上人は徹選擇集二卷を作つて、その深意を發揮せられてをりますが、とにかく宗祖のお考では、謂ふところの本願の念佛は彌陀が五劫思惟の結果、生因としては誓れた易勝の妙行で通途諸佛のそれになちこいた所があるから、その意を表はさんがために、特に冠して選擇といふ二字を加へられた譯であります。

要するに選擇集は、彌陀が選りに選つて建てられた本願の念佛に關する要文集で、この選擇本願の念佛こそは、やがてわれ／＼が實際解脱に到る唯一の道であります。選擇集十六章は畢竟その念佛に關する經釋の要文でやがてまた題は一部の總稱と稱せらるゝ所以であります。

二、題下の十四字について

茲に題下の十四字といふは、南無阿彌陀佛往生之業念佛爲先といふ十四字であります。是は前にも叙べた様に惠心の往生要集の文で、往生要集は全編十章ある中、第五の助念方法を明かすしにも七段あつて、その第七の總結、行要といふ中に見へてゐる文であります。

もつとも同處には爲先といふ二字が爲本と爲り、別にまた僧都の作である妙行業記のなかに爲先と

あつたとあります。そこで選擇集にも二本あつて、鎮西西山等に授けられた本には爲先とあり、廣本並びに觀鸞上人に傳へられたといふ本には爲本とあつたとあります。いづれも意味の上には何等かわりはありませんので、つまり往生要集はこの往生之業等の八字に一部の要旨がをさまつてゐる譯であります。この點はちかく、宗祖の往生要集大綱を參照するとよいと思ひます。

處でこゝに問題なのは、謂ふ所の念佛爲先とある念佛であります。と申しまするは、同集には廣く觀稱の二念にわたつて念佛が明かされてゐます。そしてそれが、どちらかといへば、觀念のほふを主として明かされてゐるやうに文面からはみへます。けれども再往よく僧都の精神を窺つてみると、いふところの爲先といひ爲本といはれた念佛は、結局觀念のほふにあつたものと見なければなりませんので、その點が明瞭だといへば明瞭であります。實は幽微であります。そこで宗祖は往生要集略料簡に
又文中具觀稱二念、然集主雖廣勸觀念、意在稱名也

と云ひ、また同詮要には、

依勝劣則勸觀念、約難易則專勸稱念也。而此集意、自始至終捨難取易。故序中云、披之修之易覺易行。又念佛證據門中云、男女貴賤修之不難。當知、觀稱中尙就易行專勸稱念也

と云つて、一部の肝心を發揮せられてをります。さういふ譯で宗祖はこの選擇集に於ても、また實に同様の用意を以てしてゐられます。即ち往生之業の文の上へ、南無阿彌陀佛といふ六字を標してゐら

れるのが其のこゝろで、その意味は、念佛爲先の念佛は口稱の念佛であるといふことを表示せられた譯であります。それゆへ題下の十四字の中最初の南無阿彌陀佛といふ六字は、そのまゝ要集の詞では勿論ありませんが、しかし謂はゆる取意文で、結局この十四字は、要集の要文を引用されたものとみて差支ないと思ひます。

しかし爾うすると、こゝにまた一つ疑問が起つてまゐります。それならば、何ゆへ宗祖は別にそれを一章として開かずに、題の後、文の前に置かれたであらふかといふことであります。

それについて古來いろ／＼な解釋があります。或は題號の一部だといひ、或はその解釋だといひ、又は宗祖の歸敬序だなどいふ説もありますが、相傳の義では、結前生後の文といふやうやうに解釋をしてゐます。言ふこゝろは、題號にいふところの選擇本願の念佛といふは、とりもなほさず口稱の南無阿彌陀佛であると前を結び、この南無阿彌陀佛が、要集に僧都の爲本（爲先）と云はれた往生の業だと、後の十六章を起してゐるのだと申します。

なるほど爾ういへば夫れに相異はないと思ひますが、しかしまた一面からみると、あまりに穿ちすぎた解釋では無いかとも考へられます。由來佛教の註家は、なるべく義を精細にしようといふ考から、複雑な分料を作つてみたり、難かしい法相的範疇をあてはめたりして、文義を解釋するのが古來の風となつてゐます。無論それも採るべき一つの解釋法であり、また必用なことでもありますが、しかし

又それがために、かへつて純眞な作者の心もちを傷けるといふことも時にないではありません。今のはゆる結前生後といふ説にしても、むろん間違つてはゐないので、それでよいとは思ひますが、何だかまた一面からは、少しく宗祖の心持を云ひすぎてはゐまいかと、思はれるふしが無いでもありません。で私は之を次の如く云つてはどうかと思ひます。

つまりこの要集の文は、宗祖が、曇鸞の讚阿彌陀佛の偈などの例にならつて、題の後、文の前に、部の綱要を提示されたもので、假りに題號の選擇本願念佛といふを扇子のかなめだとしてみれば（要選擇）、十六章はそれを開いた姿であり（廣選擇）、この要集の文はその疊んだ形だと（略選擇）いふことがいへます。併しこの一部の綱要を提示したといふことも、よく／＼詮じつめてみれば、結局さきの結前生後といふ説と同じことになる譯でありますが、私は寧ろさうした素朴な見方をしたほふが、却つて宗祖の心持を表はすに應さわしくはないかと考へますので、こゝに参考の爲に附加へてをく次第であります。

(つゞく)